

研究の窓

ヴィジュアルメディアや 美術史などを追究し、 メディア研究の道を拓く。

幼い頃から絵を描くことが好きだった小田先生は、大学では自分の興味・関心を突きつめ、美術史を専攻。日本美術のなかでも障壁画を研究しました。自ら課題発見・調査・分析、考察する経験を積み重ね、培った知識や力。それらを就職先であるNHKで発揮し、約30年、番組制作の最前線を走り、視聴者を惹きつけるアイデアを具現してきました。そして現在、本学メディアプロデュース学部教授として、映像制作やヴィジュアルメディアなどの授業を担当。また、ゼミでの研究活動のほかに産学連携のCM制作など新たな実践の場やチャンスを用意し、学生の成長を後押ししています。「学生たちには何事にも積極的に挑み、自分の学びを深め、社会で活かせる力を身につけてほしいと期待しています」と小田先生。教育に力を注ぎながら、自身の研究の幅も広げています。

小田先生の 主要著作

・絵画の「進化論」—写真の登場と絵画の変容 青弓社 2008年
・流用アート論：一九二〇—二〇一〇年 青弓社 2011年



小田 茂一

メディアプロデュース学部
メディアプロデュース学科 教授

【学歴】

1976年3月
2007年3月

東京大学文学部第二類美術史学専攻卒業
広島大学大学院 社会科学研究科 博士課程前期
マネジメント専攻 修了(マネジメント修士)

【職歴】

1976年4月
2006年4月～2010年3月
2010年4月～現在

NHK入局(番組制作)
愛知淑徳大学現代社会学部現代社会学科
(メディアプロデュースコース)教授
愛知淑徳大学メディアプロデュース学部
メディアプロデュース学科(メディアコミュニケーション専修)教授

NHKから本学に移り9年目を迎えました。放送局勤務時代には、番組制作者(ディレクターあるいはプロデューサー)として、担当番組に合わせ毎回の企画提案をおこなっていました。特定領域における専門性を獲得することの難しい世界で過ごしてきたように思いますが、それでもいろいろな番組を渡り歩いてきたなかで、たとえば衛星放送(BS・C)という新規メディアの発足に際しては、視聴者獲得を目指す企画として、第一線の俳人・歌人による生放送句会や短歌会の実現など、それまでにはなかった番組の開発に係わるなど、幅広い経験ができました。このようなことは今におおいに役立っています。

本学での授業は、放送局で仕事としてきた映像制作(ドキュメンタリー)の実習やマスメディアについての講義から始まりました。そして同時に、ヴィジュアルメディアについての講義を引き継いだことは、新たな研究への切り口をもたらし、くれました。

ヴィジュアルメディアのきわめて長い歴史に

おいて、その大部分を占める図像(絵画)のメッセージ内容とその変遷、そこから登場した複製技術としての写真術、これを受けての絵画の変容、さらには映像化、アートの多様化、マルメディア化、ハイパーメディア化といったメディアの拡張を踏まえての考察をおこなうことへとつながっています。

そして今は、いわば原点に立ち返り学部時代に学んだ美術史・ジャンルにおける具体的研究を少しずつ始めています。しかし研究者の世界では、出遅れ感のあることも否めません。

具体的な研究内容としては、40年前からの関心事である江戸前期の画家尾形光琳の人物・風俗画描写と国宝『松浦屏風』との関連性や、作曲家メンデルスゾーンやネガ写真を発明したタルボットなど19世紀前半の裕福な文化人のカメラ・ルシダによる風景画と写真とのつながりなど、いくつかのアート分野のテーマについて新たな考察を試みています。